

---

# 銀の魂輝く時

爽龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀の魂輝く時

### 【Nコード】

N0038T

### 【作者名】

爽龍

### 【あらすじ】

ここは幕末の江戸、かぶき町。侍の国と呼ばれたこの地も、今では天人の支配を受けてしまっている。そんな天人達の勢力を排除しようとして、攘夷戦争が勃発。この町に万事屋を構えているこの物語主人公、坂田銀時もその戦争に参加した一人で、“白夜叉”の異名を轟かせた男だった。

ある日、万事屋の元に一つの依頼が届く。それは人探しという何の変哲もない依頼のはずだった。しかし、それがやがて銀時と、かつ

ての盟友である穩健派攘夷浪士の桂小太郎、そして今や宿敵となつた過激派攘夷浪士、高杉晋助が互いに異なる道を歩ませるきっかけを作り出した男に辿り着き、それが過去の因縁が絡んだ大事件へと発展していく。今、江戸を舞台に、銀時達の“絆”の力が試される！！

只今E エブリスタより好評転載中！！

## 第零訓 人の出会いは偶然で必然

ある所に銀色の髪を持つ幼き少年がいた。

少年には親がない。兄弟もない。頼れる者は誰一人としていない。

少年はいつも孤独だった。

そんな少年を、村人達は疎み、蔑み、そして怖れた。

時には心ない言葉を浴びせ、

時には石を投げ、

最後には彼を追い出した。

少年には居場所も無くなった。

少年は何も言わなかった。

いや、言えなかった。

心の中にあるものを吐き出すところを持ち合わせていなかったのだから。

一人で生きて行かねばならない。

自分の身は自分で護らねばならない。

試行錯誤していく内に、少年は屍の山に辿り着いた。

少年はもうなりふり構っていられなかった。

そして、孤独な少年は

いつしかこう呼ばれるようになった。

“鬼”と

鬼と呼ばれるようになってから、少年に対する風当たりは強くなった。

生きる糧となった戦場いくさばの跡地から追い出されそうになった。

屍を喰らう鬼を倒すだ何だと襲い掛かられたりもした。

彼はその度に刀を振るった。

少年はその度に人間を この世界を憎むようになった。

そして何度も繰り返す内に、少年に近づく者は誰もいなくなった。

少年の世界にいるのは血の通ったヒトではなく、もう物言わぬ死体だった。

暗い暗い闇の中で、生きているはずの少年は、まるで動かぬ屍だっ

た。

しかし、そんな彼を闇から救い出す、一筋の光が現れた。

伸ばされた手は銀色の髪を優しく撫でた。

「屍を喰らう鬼がいると聞いて来てみれば…君が、そう？」

少年は一瞬持っていた握り飯を取り落としそうになった。

鬼と呼ばれるようになって以来、初めてまともに話しかけてきた人間<sup>ト</sup>。

恐る恐る見上げれば、優しく微笑みかけてきた。

しかし、少年は人間を信じることを止めていた。男と距離を取るように跳び、警戒心を露に刀を抜いて睨みつけた。

だが、男は飛び掛かって来ることも、怯えて逃げ出すこともしなかった。

刀を向けられているのに、腰に挿した刀を抜くでもなく、ただ優しく微笑んだまま少年を見ているだけだった。

## 第一訓 昔話はほどほどに（前書き）

こんにちは（ ）

こうして挨拶をさせていただくのは、恐らくここが初めての爽龍です

ハイ、皆さんの言いたいことはわかりますよ

何なら、声をそろえて叫んでみましょうか

せーの！！

『最初の連載サボってお前は何新しい小説作ってんだ！！』（爽龍心の声）

だって だって

他のサイトじゃ、二次創作小説に対する風当たり強くて！！

強制的に非表示にされちゃったから、もう誰にも読んでももらえない  
って思ったから！！

そうだ！移動しちやえ

…スイマセンでした、ホント

ちゃんと両立出来るように頑張りますので、どうか許してください  
！！

こんなくだらん内容で前書きも長くなっちゃってスイマセン…

では、本編どうぞ!!

## 第一訓 昔話はほどほどに

その日も、寺子屋には普段通りに始まった。

「では、今日も授業を始めましょうか。」

寺子屋の師 吉田松陽は柔らかな微笑みを湛えて生徒達を見回した。長い黒髪を一つに纏めた真面目そうな少年 桂小太郎が手を挙げる。

「先生、今日は何をするんですか？教科書はもう学習し終えていますか。」

「教科書はもう必要ありませんよ。無論筆もね。今日は皆さんの夢を聞いていきたいと思えます。」

松陽の言葉に、生徒達は一気にざわついた。

「夢？夢って何だろう？。」

「将来何がしたいとか、そういうことじゃないの？。」

「あつ！だったら俺たつくさんあるぜ！お祭りに行つて焼きそばを食べて、町へ行つて屋台で寿司を食べて。」

「お前、食つてばっかじゃないか！」

そんな生徒達のやり取りに、松陽はクスツと笑つてから生徒達を静めた。

「食べることも確かに良いですね。でも、今日聞きたいのは、皆さんが将来どんな大人になってどんなことをしたいかです。じゃあ、順番に聞いていってみましょう。」

「僕は大人になったらお父さんと同じ大工になる！それで皆がびっくりするくらいすごい家を建てて住むんだ！」

「ふふ 良い夢ですね。じゃあ、君は？」

「私は松陽先生みたいな寺子屋の先生になって、先生から教わったことを生徒達に教えたいです！」

「おお、嬉しいですね。期待していますよ。」

弾むような子供達の声に、松陽は顔を綻ばせる。次に松陽は頬杖を置いて自分を見つめる、いかにも気が強そうな少年に話を振った。

「晋助、君はどうですか？」

少年…高杉晋助は松陽の瞳を真っ直ぐに見たまま、凜とした声で言い放った。

「俺は、先生の言うことを良く思っていない奴らに先生は正しいんだって教えてやる。」

「…ありがとう、晋助。その気持ちだけで私は嬉しいですよ。」

松陽が目を細めて微笑みかけると、晋助は照れたように目をぱつと逸らした。

「じゃあ次は 小太郎、君はどうですか？」

小太郎はチラリと晋助の方を見ると、真顔で答えた。

「少し癢に障りますが、俺も大方高杉と同じようなことをしたいと思っっています。」

「はあっ！？ツラテメエ、俺のパクんじゃねーよ！！！」

「ツラじゃない桂だ！！だから大方似ているだけだ！！誤解されぬように前置きしたがどうやら頭の回らない貴様には通じなかつたようだな！！！」

「何だと！？」

一触即発の雰囲気、生徒達はビクリとしたが、パンパンと手を叩く音で喧嘩には発展しなかつた。

「こらこら、二人とも喧嘩は良くありませんよ。 だけど、晋助も小太郎も優しい子ですね。私は君達のような生徒を持つことが出来てとても幸せです。」

松陽はふわりとした笑顔を浮かべたが、晋助と小太郎はその中にどこか哀しげなものを感じて眉をひそめた。

（（先生…？））

松陽は不安げに自分を見つめる二人に微笑み、授業へと話を戻した。

「もうあまり時間がありませんね。じゃあ最後に、銀時はどうですか？」

松陽は一番端の一番後ろの席の方を見遣った。そこには、刀を大切にそうに抱えた銀髪の少年…坂田銀時がいたのだが

「うーん…いち、じ……」

寝言を漏らしながら爆睡していた。松陽はそんな銀時を見て苦笑した。

「全く 銀時は相変わらずですね。」

他の生徒達もクスクスと笑ったが、銀時は首をゆらゆらと揺らして眠ったままだった。松陽は眠る銀時を含めた生徒全員の顔を見回して言った。

「今日は、皆さんの夢について聞いていきましたが、どの子も大変素晴らしい夢を持っていますね。将来その夢を叶えた時には、大きくなった皆さんはきっと輝いているはずですよ。」

ガクッ

銀時の首が大きく揺れ、その衝撃で銀時は目を覚ました。松陽は一度言葉を切り、銀時に優しく微笑んだ。そしてまた口を開く。

「けれど、夢を叶えるにはその夢を持った自分の信念を貫き通さなければなりません。それは、辛く苦しい道になるかもしれません。逃げたくなる時があるかもしれません。自分の決めた道から外れそうになってしまうことも、時にはあるかもしれません。」

銀時は松陽をじっと見つめ、朗々と紡がれる言葉に聞き入っていた。

「ですが、それを乗り越えた先に待つ明るい未来は、きっと君達を照らしてくれることでしょう。だからこそ私は皆さんにその険しい道のりを越えて行って欲しいのです。周りの意見に左右されず、自分がこうと決めたものを、大切にしていって欲しいのです。そこで、皆さんにこの言葉を贈ります。」

松陽は一度口をつぐみ、壊れ物を触るかのような優しい口調で言った。

己の信ずる道を行きなさい …

夜。

銀時は松陽と二人、縁側で月を眺めていた。ふと、松陽が銀時に尋ねてきた。

「そういえば、昼間銀時は寝ていたので聞けていませんでしたが、銀時、君の夢は何ですか？」

突然の質問に、銀時はがしがしと頭を掻いた。

「えー 俺の夢？ あんま大したことじゃねーぞ？」

「ふふ、良いじゃありませんか。大したことではなくても、それは君が持つことの出来た大切な夢ですよ。」

松陽の言葉に、銀時は迷うように視線を泳がせたが、やがて何かを決心したかのか、真っ直ぐに松陽を見て言った。

「俺、前は自分の身を護るためだけに刀振り回してたけど、先生に教えて貰って気付いた。それじゃあ駄目なんだってこと。だから、これからは俺の信念を 己の魂を護るために刀を握れる、そういう侍になる。」

松陽は一瞬目を見開き、そして淡い微笑みを浮かべた。

「その言葉を聞けただけで、私はとても嬉しいですよ…」

ズブツ

肉を切り裂く鈍い音がする。途端に銀時の小さな身体は松陽の手に押し出される。地面に付く瞬間、松陽の方を振り返った銀時は、松陽の腹を貫通する刃、そして松陽の後ろに立っている笠を目深に被った男を見た。笠のせいで顔は見えないはずなのに、その男が醜く嗤わらっているのがわかった。

「幕府の命令だ。残念だが、御命頂戴する。」

「せ、せんせ」

「ッここから、離れなさい銀時…!!」

銀時は唇をきゅっと噛み締めて頭を振った。

「嫌だ！今助けるからな先生エッ！」

「だっ、駄目です、よ 銀時 ツ…」

松陽は叫ぼうとするが、腹部を襲う鈍い痛みと、軽く混濁してきた意識のせいで、思うように声が出せなかった。銀時は松陽の必死の

制止を無視し、傍らにあった刀を手に取った。それは、初めて出会った時、銀時が松陽から貰った刀。

銀時は迷うことなく鞘から刃を抜き、走り出した。

「先生は俺が護るんだアアア！」

銀時は跳躍して男に飛び掛かった。が

ガツキイイーン！

力の差は歴然だった。

銀時の刀はいとも容易く弾き飛ばされ、地面に突き刺さった。

男と目が合う。笠の下に隠されていた顔は、間違いなく天人のものだった。男は銀時を見るとニヤリと笑ったのが見えた。

「フン なかなか面白いガキだ。だが、今は邪魔なだけ…本当は必要ないが、お前も殺してやろう。」

そう言うと同時にいつの間にか抜き出されていたのか、男の腰に挿されていたらしいもう一つの刃が銀時に振り下ろされていた。逃げようにも身体が石のように硬くなり、動くことが出来ない。

（もう、ダメだ…！）

銀時がそう思い、目を瞑った時だった。

ギイイーン！

刃と刃がぶつかり合う音が響いた。恐る恐る目を開いた銀時が見たものは、男の刀と交わる松陽の刀だった。

「この子に　ッ、手出しはさせませんよ…!」

「フツ、死にかけの分際で何が出来ると言うのだ?」

松陽は男の方を見据えたまま、銀時に言った。

「君は…私を助けると言ってくれましたね　とても嬉しかったです  
…でもね、銀時　君が、私のことをそうやって想って　ッ　くれる  
ように、私も君のことを想っているんですよ　だからっ!」

そう言うと松陽は銀時を突き飛ばした。

「君は、生きなさい　!」

その後は、全ての動きがまるでスローモーションのようにゆっくり  
としているように感じられた。

冷酷な笑みを浮かべた男は、松陽の腹部に刺さっている刀を引き抜  
いた。途端、松陽の口からは鮮血が零れ落ち、その表情が苦しげに  
歪んだ。銀時は、それをただ見ていることしか出来なかった。

“先生”　そう呼びたいのに、声が出ない。

すぐにも駆け出して側に行きたいのに、足が動かない。

手を伸ばしてその腕を掴みたいのに、指先さえも届かない。

地面に叩きつけられた銀時が身体を起こした時、彼の目に映ったも  
のは、冷たく嗤う男でも、苦しみに顔を歪ませる恩師でもなく、真  
っ赤な炎の海に包まれて燃え盛る寺子屋だった。

「あ ああ  
」

飛び散る火の粉の色とは対照に、銀時の頭の中は真っ白になっていた。

嘘だ

そんなの嘘だ…

先生が

先生が死又ナンテ

「 ツ松陽先生エエエエエ！！！」

ようやく口から出された少年の叫び声は、虚しくも空へと響き渡った。

**第二訓 せちがらいのこの不景気な世界経済（前書き）**

後書きまで話が続きます

## 第二訓 せちがらいのこの不景気な世界経済

ガバツ！

朝、飛び起きた銀時は、肩で息をしつつ汗ばむ自分の手を見て、今までののが全て夢だということに気がついた。

「チツ 朝っぱらからなんつーモン見せやがんだよ、ったく」

頬や背中を伝う汗を気持ち悪く感じながら、銀時は誰にも聞こえないような小さな声で悪態をついた。

「…着替えるか」

銀時が布団を片付けて身支度をしていると、襖の向こうで玄関の扉が開かれる音がした。この『万事屋銀ちゃん』で働く少年、地味メガネが代名詞の志村新八である。

「おはようございまーす。もう朝ですよー。銀さんも神楽ちゃんも、もういい加減起きてくださーい。」

新八の足音が銀時の寝室の方へ向かって来る。

ガラツ

「銀さん入りますよー って起きてたんですか？珍しいですね、銀さんが早起きなんて。」

寝室に入ってきた新八は、銀時が目覚めていることに本気で驚いている様子だった。新八のその態度に、銀時は少タイラつきを覚えながらも、敢えていつも通りに返答した。

「まあな。銀さんだつてやる時はやるんだよ。」

「いや 常識の範囲内でしょ、それ。じゃあ僕、神楽ちゃん起こしてきますね。」

割と鋭いためか、銀時の様子がいつもと異なることに若干眉をひそめたが、早起きの理由も特に聞かずに新八は寝室から出て行った。正直、新八が尋ねて来なかったことに安心している自分がいる。

「…聞かれても何答えるべきか、わかんねーしな。」

一人になった銀時は、ひとりでに深いため息をついていた。

（銀さん、どうかしたのかな。気にはなるけど何か聞いちゃいけないような雰囲気だったし…とりあえず黙ってた方がいいよな）

新八はチラリと寝室に目を向けたが、小さく首を横に振って押し入れに向かった。

「神楽ちゃん、朝だよ!」

「んー うるさいアル 黙れヨ新八ィ…」

新八が開けた押し入れの中には、再び布団を被ろうとしている少女がいた。彼女の名前は神楽。宇宙最強と謳われる戦闘種族、夜兎の一人で、れっきとした天人である。

「そんなこと言わないで早く起きてっつてば！」

身体を揺さぶられ、眠りを妨げられた神楽の堪忍袋は、半ば大きな音を立てて切れた。

「黙れっつってんだろこのダメガネエエエ！！！」

ドカッ！

「おぶうつっ！！！」

思い切り殴られた新八は、軽く吹っ飛んで壁に打ち付けられた。

「ちよっ、何すんの！？」

赤く腫れた頬を押さえながら抗議すると、再び神楽が飛び掛かってきた。

「レディーの睡眠を妨げたお前は殴られて当然ネエエエ！！！」

「ギヤアアアア！！！」

キレた神楽がさらに暴れ、ドスンボタンと激しくなる音。銀時は寢室に伝わる振動を感じながらボリボリと頭を搔いた。

「オイオイ、アイツら何やってっくれてんの？こいつぁ壁に風穴とか空きそーだな」

そろそろ止めるべきかと銀時が腰を上げた時、丁度いいタイミングで下の階から家主であるお登勢こと寺田綾乃の怒鳴り声が響いた。

「アンタ達少しくらい静かに出来ないのかい！？家賃もろくに払わないくせに家壊されちゃ、たまったモンじゃないよ全く！」

何の変哲もない、万事屋の朝。そう、今日も普段と何一つ変わらない朝。これから普段通りの一日が過ぎていくはず。

だが、銀時は普段とは違う、激しい胸騒ぎを感じていた。

（あんな夢見ちまったせいかな？何かの予兆的な…訳ねーか。気のせいだ、気のせい。朝っぱらから頭脳の無駄遣いすることあねエ。よっぽどのがありゃ、ツラ辺りに話しゃいいんだし。……今は忘れさせてくれ、先生…）

銀時は一瞬ぐつと拳を固めた後、掌を開いて寝室から出た。

「むっ」

『どうしました？桂さん。』

いつものように真選組の追跡から逃れている途中、いきなり立ち止まり難しい顔をしている桂に、白い謎の生物エリザベスがフリップで尋ねた。

「今日はフリップなのだな、エリザベス。いや、少し 嫌な胸騒ぎがしてな。あんな夢を見たせいかもしれんが…」

『夢ですか？』

「ああ…遠い昔のな。あれは、先生の最後の授業の夢だった…」

ざあつと風が二人の間を吹き抜けていく。遠くを見つめるように目を細めた桂の長い髪が、それに応じるようになびく。

「俺達の知らないところで、何かが起ころうとしているのかもしれない。それが、俺達の過去を蒸し返すようなことでなければいいが」

「あの人に言わなくていいんですか？」

「銀時か？アイツにはまだ言わん方がいい。本当にそのようなことが起きている状況なのかもよくわからん今、アイツに単なる俺の推測を話したところでどうなるわけでもないだろう。話すだけ無駄だ。奴も聞く耳を持たんだらうしな。それに」

「いたぞオオ！！桂だアアア！！」

後に続くはずだった桂の言葉は、真選組隊士の叫び声によって遮られた。

「フン！幕府の犬も少しは速く走れるようになったということか行くぞエリザベス！」

桂とエリザベスは屋根づたいに走り去って行った。

燦然とした輝きを放つ太陽。その眩しさすら感じる光を貰い受け、まるで影のように恍惚と光る月面。それらの間に位置する碧き星は、天人達を魅了し欲させ、今やその手中に収まりかけてしまっている地球。

耳にヘッドホンをつけ、背に三味線を携えたサングラスの男は、沈黙を身に纏いながら宇宙に浮かべられたその惑星でも眺めているのだらうか、窓の側から一度も動くことはない。

微動だにしないその男の元へ部下が一人駆け寄ってきた。

「万斉様、もうすぐ地球に到着いたします。」

「……。」

「万斉様？もうすぐ地球に到着しますよ？」

「……。」

「万斉様！？聞いてます！？？」

「ん？ああ、聴いてるでござるよ。今日は寺門通の『チヨメ公なんざクソくらえ』という曲で」

「ちっげーよ！！寺門通じゃなくて俺の話だよ！！もう地球に着くんですけどオオオ！！！」

男…河上万斉はそれをやっとな聞き取ったようだ。

「そうか 分かったでござる。今度の仕事は今まで以上に腕が鳴りそうだ……」

「は？」

意味が解らないといった様子の部下の顔をちらりと見て、万斉は再び窓の外を見遣った。サングラスには必然的に碧い星が映る。

「がんじがらめに巻き付けられていた鎖が契れて、激しい因縁の交響曲が奏でられる…今の晋助の顔を見るとそんな予感がするでござるよ。」

宇宙船のスピードが上がる。着陸の準備に差し掛かったようだ。窓に映り込んだ万斉の口許が、ニヤリと曲線を描いて歪められた。

## 第二訓 せちがらいのこの不景気な世界経済（後書き）

鬼兵隊の宇宙船の遙か後方、木星付近…そこに彼等はいた。

特に気の利いた明かりがある訳でもなく、窓から見える数える程の星の光だけが船の廊下を薄暗く照らしている。

コツコツコツ…

船員は皆眠りについたので、静まり返った船内を歩く足音が一際目立って響いた。足音の主は、迷うことなく一つの扉の前に立つと、開かれた部屋の中へと入った。部屋の壁には大きなモニターのようなものが一面に敷き詰められており、蒼色に輝く星 地球が映し出されていた。

そのモニターの前には先程入って来たのとは別の人物が立っていて、流されている映像の地球を満足そうに見つめている。黒い衣に身を包み、笠を目深に被っているために目元は見えないが、その口元は嫌らしく上向きに歪んでいる。

モニターから目を離さない彼に向かって先程入って来た人物が口を開いた。

「あと二時間程度で地球に到着いたします。これより、着陸の準備に入ります。」

「そうか。後は我等の目的を果たすだけだ。居場所はわかっているのか？」

「はい。先に地球へと兵を向かわせましたところ、まだはつきりと断定した訳ではありませんが、大方の目処はついたことです。」

「ならば、私の顔に泥を塗ってくれたあの侍を潰せるのはもう間もなくということなのだ。地球に着き次第、早急に奴を私の前へ連れて来るのだ。多少手荒な真似をしても構わん。ただ、奴を抹殺するのはこの私だ。絶対に生かして連れて来い。くれぐれも殺すな。」

重く響くような声音に、女はゆっくりと跪いた。

「 黒夜叉様の仰せのままに…」

### 第三訓 お局に苛められている奴等は未来のお局達

それはやけに色濃い雲が広がった日のことだった。

新八が窓越しに空模様を見ながら言った。

「この様子じゃ、午後には雨が降っちゃうな。念のため洗濯物は中に干しときますね。」

「えー 雨は人の気分をくさくささせるアル。このままじゃ私の心が悪臭を放つようになってしまうヨ。」

「え、何？何なの？今の。かけてんの？かけたつもりなの？大丈夫だ安心しろ神楽。悪臭放つてんのは腐りきったお前の脳みそだ。」

「うるせーヨ！！黙れこの天パ野郎！！仕事来ないからって私に当たるんじゃないヨ！！！」

「ああ！？んだとコノヤロー！！もう一度言ってみろ！！次言ったら定春の排出した臭い爆弾投げるからな！！！」

「もう二人とも！まだ雨降ってないじゃないですか！降る前からそんな調子じゃ先が思いやられるよ。」

新八が呆れてため息をついた時、インターホンの音と共に、女の声が響いた。

「すみませーん！万事屋さんいらっしやいますかー？」

「銀さん、誰か来たみたいですよ。もしかして仕事じゃないですか

「？」

しかし、銀時はいつも通り気怠げに椅子にもたれ掛かって足を机に投げ出した。

「どーせ客のふりしてキャサリンかたまが金取りに来たんじゃねーのか？」

「キャサリンさんはともかく、からくり機械のたまさんにそんな芸当出来るとは思えないんですけど」

「あーもう面倒くせえな。出たきゃ出る。ただし金回収しに来た奴だった場合、お前は一生俺達の使いつぱだ。」

「それ今とあんまり変わんねーじゃねーか！」

「新八ってダメガネの割には自分のことパシリだって自覚してたアルな。」

「うるせエエエ！！僕だって出来れば言いたくなかったよ！！現実から顔背けたかったよ！！っーかお前ら僕を何だと思ってんだ！！」

「「パシリ。」」

「声を揃えて言うなアアア！！もう頭に来た！しばらく言うこと聞くのやめようかな！」

「あの一……」

不意に遠慮がちな声がして、新八は我に返った。

「えっ！？あっ！すみません！」

ぐるりと振り向くと、そこには一人の女が立っていた。顔を包帯のようなもので覆い隠し、全身黒い衣服を纏った、何とも怪しい雰囲気の人だ。唯一見えるのは、紅く鋭い瞳と、瞳と同じように紅く輝く石が埋め込まれた耳飾りの付いた尖った耳のみ。どうやら天人らしいということしか判らない。銀時達は女から背を背けると、互いに顔を寄せ合った。

「おい、何なんだよアイツ。怪しいにも程があるだろ。まるで怪しさを絵に描いたような奴じゃねーか。あんなのエリザベス以来だよ！？どーすんだよ、ぱっつあんよオ！」

「僕に言われたって困りますよ！」

「私威嚇してみるネ！怪しい奴に襲われそうになったら、とりあえず威嚇しろってパピーが言ってたアル！」

「あの坊主、娘に何教えてんだ？犬じゃあるまいし。」

「ていうか、神楽ちゃんなら威嚇する前に相手をめった打ちにしちやうんじゃないですか？」

二人の話が耳に入らなかった神楽は、女の前にはずいっと踏み出た。

「何だよテメー！勝手に入って来んじゃねーぞ！そういうのをなあ、不法侵入って言うんだヨ！警察に通報するぞコルア！」

いきなり怒鳴られたからか、彼女はびくりと身体を震わせ、額が足

にくつつきそつな勢いで頭を下げた。

「すすみませんっ！中にいらっしやるのがわかって声をかけたのですが、誰も出て来て下さらないので思わず入ってしまいました！本当にごごめんさい！」

今にも噛み付きそつな神楽を、新八は慌てて抑えた。

「かつ、神楽ちゃん！すみません！えっと それで何かご用ですか？」

見かけによらず気の弱そつな女は、我に返つたように居住まいを正した。

「あつ、はい。私は紅華ベニバナと申す者ですが、実は人を探していただきたくてここへ来たのです。」

「人？」

紅華と名乗つた女は神妙な面持ちで（新八にはそのように見えた）言つた。

「私、あるお方にお仕えしているのですが、探し出して頂きたいのはそのお方の想い人なのです。」

「想い人 って、恋人つてことですか？」

新八が尋ねると、紅華は少し困つたように眉を寄せた。

「恋人 と一概に言えるような関係ではないとおっしゃっています

た。」

「へえ、そんなに熱々の中なら自分で探したらいいんじゃないの？」

「ちよつ、銀さん！何自ら仕事なくそうとしてんですか！」

「うっせーな。ただでさえ雨降りそうな中、自分を奮い立たせてジャンプ買いに行かなきゃなんねーのに余計なこと増やしたくねーんだよ。」

「いやそれ、明らかに間違ってます。明らかに余計なのはジャンプの方です。」

気だるそうに言う銀時に、新八が冷静にツッコむと、今度は一体どこから持って来たのか、サングラスをかけた神楽が顎をしゃくった。

「あのねえ、奥さん。ウチ万事屋って看板提げてやってますけど、これは商売なんですよ。何でも屋と言っても、それ相応の見返りつてモンがないとねえ……」

「お前はどこの悪徳業者だよ！」

すると紅華はフツと微笑んで（新八の目にはそう映った）、懐から袋を取り出した。

「勿論、タダでは申しません。これを。」

差し出された袋を素早く受け取り、銀時は中身を確認した。その様子を見ていた新八は、驚きの余り声を上げた。

「えっ、ウン 100万円!?!?」

「「で、特徴は?」」

「……。」

#### 第四訓 子供にナメられない大人に私はなりたい

今、万事屋三人組は通りを歩いている。銀時の手にしている札束の詰まった袋を、キラキラとした瞳で神楽が見つめた。

「100万円あったら酢昆布どれだけ買えるアルか!? きっと100年分くらい買えるネ!!」

「何でテメーはいつも例えが酢昆布なんだよ。つーかそんなに酢昆布いらねーよ。ちなみにこれはたまった家賃と俺のジャンプ代になるので残りません。」

「僕らの給料は!? まあ一度だって給料らしい給料もらったことないですけど。」

「そういえばそうアル! 給料よこせヨ天バ!」

「何言つてんだ。俺アいつだってない金集めて給料やってんじゃねーか。神楽は日頃から酢昆布買ってやってるし、新八は まあアレだ。」

「アレって何!? ていうか、銀さん僕に何もくれたことないですよね!?!」

「んなことねーよ。だからアレだ、色々助けてやってんだろ? シスコンのお前のために銀さん奮闘したじゃん。」

「姉上を助けてくれたのには感謝してますけど、それとこれとは別ですよ! つーか僕はシスコンじゃありません!」

新八の反論を軽く無視して、銀時はある店の前で立ち止まった。

「あ、ここじゃね？『BAR 弁財天』。」

新八がメモと店の名前を見比べて頷く。

「そうみたいです。でも、ここってバーですよ？昼間なのにやってるんですか？見た目はとりあえず普通に見えますけど。」

「ま、天人御用達の店らしいし、どうせろくでもねーことしてんだろ。治外法権だ何だつて騒がれんのが面倒だから警察もほったらかしにしてるってとこだろーよ。」

銀時は心底どうでもいいといった感じに、耳をほじりながら言った。

「さらりと恐ろしいこと言わないでくださいよ。」

新八は思わず顔を引き攣らせた。

「銀ちゃん、この店の中から気配がするアル。一人二人じゃない少なくとも四十人…。」

そう言う神楽の目には、先程までの子供らしい輝きではなく、鋭い夜兎のものがぎらついていた。銀時は面倒臭そうに頭を掻きながら大きな溜め息をついた。

「ったく、何で俺達をこんないかにも危なそうな場所に行かせんだあの子。俺達ア人間だぜ？神楽だつて夜兎とはいえまだ産毛生やしただ程度のカキだ。」

「レディーにむかってガキなんて失礼アル！それに毛なんて例え使うなんて最低！だからアンタみたいな男はモテないのよ！」

「オイ、お前途中から口調変わってんぞ。」

「あの、銀さん 僕さつきからずっと考えてたんですけど、これ本当にただの人探しなんでしょうか？」

「あ？」

新八は眉間に皺を寄せた。

「いくら仕えてる人からの依頼だからって、たった一人の人間を探させるのに100万円なんてやっぱおかしいですよ！それに、探すべき人の特徴は分からないくせに店の名前ははっきり、しかも一人いない天人だらけの店ばかりだし 僕らもしかして誘導されてるんじゃない……」

新八の言葉に、銀時は呆れたように肩をすくめた。

「バカか、お前。俺達がいつ宇宙的有名人になったよ？全ツ然なつてねーだろーが。そんなんだつたら今頃三食ふりかけご飯とか、毎日卵の黄色い黄身を見続けて鬱になりそーとか、絶対なつてねーよ。でも俺達は今まさにこういう状態だ！窮地に追い込まれてんだよ！日々刻々とクララの車椅子の如く崖っぷちに追いやられてんだよ！つー訳で、この100万は決してお前らの給料にはならない！ドゥーユーアングダスタン！？」

「そんなの納得いかないネ！！有名にはなっていないかもしれないけ

ど、紅桜篇とか、吉原炎上篇とか、振り返ってみれば私達が何気に命懸けで戦った時のことが鮮明に甦るアル！！なのに何も貰えないなんて、報われないあのゴリラと一緒にネ！！」

「アイツは警察官としても人間としても終わってるからな。最早人間にすら見られてねーし。何の得もない点は一切でも、まだ俺達の方が一步リードしてんじゃね？」

「そんなお得感ゼロな話聞かされたって、私ちつとも喜べないアル！！」

聞かされる側が呆れる程のくだらない言い争いを始めた二人を見ながら、新八は銀時にはぐらかされたように感じた。

（銀さんは何か知ってるのかな？そういうえば銀さんと依頼人の天人、僕らより遅れて出てきたな。何となく話しかけづらい雰囲気だったし、もしかして話したのか？だとしたら一体何を？うーん：何も把握出来てないのに考えても仕方ないか。だったらこの際聞いてみるか。直球で聞けばもしかしたら答えてくれるかもしれない。）

「あの、銀さ」

ガチャリ

「えっ」

新八が思いきって銀時に直接尋ねてみようと思いついた時、バーの扉の鍵が外される音がした。銀時はそれを見遣りながら軽く舌打ちをした。

「どつやらあちろさんが俺達に気付いちまったみてーだな。あーあ、お前がうるさくするから！」

「何を言うアルか！銀ちゃんの方がうるさかったアル！」

「言ってる場合かお前ら！！どつするんですか銀さん！」

「仕方ねエ。どうもこうも、行くしかねーな。」

「あつ！ちよつ、待ってくださいよ！」

「置いてくなんて理不尽アル！」

そう言ってさっさと歩き出した銀時の背中を、新八達は慌てて追った。

## 第五訓 一寸の虫に魂も糞もない

銀時達が入り口の扉の前に立つと、一人の天人が出て来た。猿のよ  
うな風貌をしているが、首に蝶ネクタイが付いているところを見る  
と、どうやらBAR弁財天の店主らしい。いかにも嫌そうな顔で銀  
時達を見ながら言った。

「おたくら何？ここ、何の店だか分かってる？バーだよバー。夜し  
か営業しないことくらい分かるでしょーが。それにね、この店は天  
人専用なんだよ。アンタら人間は悪いけど、どんなに金積まれても  
入店お断りだから。」

「私はれっきとした天人ネ！こんな奴らと一緒にすんなヨ！」

店主に食ってかかるうとする神楽の襟首を掴みながら、銀時はフン  
と鼻を鳴らした。

「ど丁寧にどーも。けどこっちこそ悪いな。俺アテメーの店に金積  
む気はねーし、つーか積める金ねーし。そもそも俺達ア酒飲みに来  
た訳じゃねエ。面倒だが仕事しに来たのさ。ちよいと中入らせても  
らうぜ。」

銀時が踏み込もうとすると、店主は慌てて止めた。

「ちょ、ちょっとそりゃあ困るよ。今取り込んでんだ。つーかさっ  
き入店お断りって言わなかったっけ？」

「客で来たんじゃないかねーんだからいいだろーが。それとも何か？人に  
見せらんねーようなことしてんのか？天人同士でナニの握り潰し合

いでもしてるのか？」

「ちよつ、銀さん！それ言っちゃっていいことじゃないでしょ！」

「新八イ、ナニつて何アルか？」

「なつ、何でもないよ！神楽ちゃんは絶対知る必要のないことだから！というか知っちゃダメだ！」

「何？どしたの新八君。顔真つ赤だけど。銀さん別に変なこと言つてないけど。ナニつてアレだから。魂だから。命つて意味で言つただけど、違うアレに聞こえたんだなあ。ていうか新八君てどんな想像してんの？いつもそんなこと考えてんの？欲求不満？そりゃそーか、まだ童貞卒業出来てないもんなあ。」

「うるせエエエ！！っかアンタだつて人のこと言えないでしょーがアアア！！」

「何だヨオ！ナニつてただの汚い玉のことアルか！お前らレディーの前でよくそんなるくでもない話が出るアルな！聞いて損したネ！」

「ええ？今何て？レディーってどこに居んの？見えないんですけどオオ！」

「よく見るこの腐れ天パ！！目の前に居るだろうが！！！」

「あれー！？おかしいなあ！！俺の目の前に居るのは地味メガネと何の可愛いげもねえ怪力娘だけなんだけどなあ！！！」

「んだとゴルア！！もういつペン言ってみろ！！私の傘でお前のそのモジャモジャの脳天ブチ抜くぞ！！」

「あア！？何だとコノヤロー！！撃てるモンなら撃ってみやがれ！！この新八盾メガネにして逃げてやらア！！」

「それ完全に僕ただとばつちり喰らうだけじゃないですか！！つか新八と書いてメガネって読むの止めてくれませんか！！？」

「いいんだよ！！テメーの主成分は所詮メガネなんだから！！」

「あんまり言うときれますよ！？つて、え…？」

ギヤアギヤアと店の前で騒ぎ立てたせいか、気がつくやと銀時達は周りを天人で囲まれていた。

「あのねえ、あんまり騒がれるとこっちはすごく迷惑なんだよね。これは立派な営業妨害だよ。」

「あれー？おかしいなあオイ。今昼だろ？まだ営業時間じゃないんじゃないかったっけ？」

銀時は腰に挿した木刀に手をかけながら、ニヤリと笑った。神楽も傘を構え、新八も少し冷や汗をかいたものの、すぐに態勢を立て直して木刀を構えた。

「出来れば事を大きくしたくないし、警察沙汰になっても困るが、アンタらはどうやらそのまま放っておいていい相手じゃないみたいだからなあ。仕方ないやれエエエ！！！！」

掛け声と共に天人達が一斉に襲い掛かって来た。銀時は木刀を抜き去ると同時に跳躍した。そして相手の天人が振り回す金棒をひらりとかわし、天人の背後へ回って頭部に思い切り木刀を振り下ろした。天人はぐらりと傾き、そのまま意識を飛ばす。

その隣では神楽とマシンガンを持った天人が激しい撃ち合いを繰り広げていた。神楽は天人のがむしやらかな弾をバク転しながら避ける。と、片手で自らの身体を支え、残った手に傘を持ち、的確に天人の急所をブチ抜いた。天人は弾切れのマシンガンを神楽に振りかざしたが、神楽はそれを開いた傘で受け止め、天人の顔面ど真ん中に飛び蹴りを食らわせた。天人は鼻から血飛沫を出しながら大きな音を立てて倒れた。

「なっ 何なんだコイツらアアア!!!」

「ッ人間のくせに…馬鹿強エ!!!」

この結果を予想していなかったのだろう、天人達は完全に動揺していた。そう、彼の存在にも気づかない程に…

「うおおおお!!!」

「!?!」

「な、何だ!?!」

「食らえっ! 必殺・脛打ち!!!」

ボキッ!!!

「ギヤアアア!!!?!」

「ツ痛エエエエ！！！」

数人の天人が、脛をおさえて倒れた。彼 新八は肩で息を整えながら眼鏡をくいと上げた。

「ふうっ！」

「おお！すごいアル、新八！」

神楽は感心したように言い、銀時は耳をほじりながら普通の無表情で新八を見た。

「お前、自分の特性よく使いこなしてんじゃねーか。地味さを活用して空気に溶け込み、敵の懐に入る 俺達にや出来ねー芸当だ。着実に地味キャラが板に付いてるじゃん。流石だな、新八。山崎と肩を並べる地味キャラだけのことはある。やっぱりお前はやれば出来る子だよな。」

「銀さん、それ褒めてるんですか？それともけなしてるんですか？」

新八は微かに青筋を額に立てつつ、銀時に引き攣った笑みを向けた。

「勿論けなしてるんだよ、新八君。んなこたア今はどーでもいい。それよりも話、聞かせて貰わねーとなア……」

そう言つて銀時は、怯えと焦りが入り混じった目でこちらを見ながらガタガタと震えている店主を見遣った。完全に戦意は喪失しており、おまけに腰まで抜かしているようだった。ザリツと銀時のブーツがアスファルトを踏む音を鳴らせば、それだけで肩をビクリと震

わせた。神楽はそれにジトツとした視線を送った。

「喧嘩吹っかけたわりには骨のない奴アルな。」

「オイ、その猿の惑星人。テメエ、この女知ってるよな？」

「え？」

“あのお方の探し人”のことを尋ねに来たつもりだった新八は、思わず素っ頓狂な声を上げた。しかし、銀時はそれに構わず店主に写真を突き付けた。

「ッ！そつ、それは…」

「何だよ、口止めでもされてんのか？まあ良い。俺が聞きてエのはこの女の素性じゃねエ、目的だ。それくらいは吐けや。」

銀時は店主の胸を踏み付けながら木刀を首筋に宛てがう。弱氣の天人には、もうそれだけで充分だった。

「おお俺だつて知ってる訳じゃないんだ！ただ、銀髪で腰に木刀を挿した男が店に来たら動けない程度にやれって言われただけで」

ドスッ！

「ッが！」

「！？」

鈍い音がして、店主の口から呻き声が漏れた。そしてそれきり二度

と物言わぬ屍になってしまった。天人のこめかみに刺さった針のよ  
うな凶器に、新八は思わず叫びそうになった。神楽も驚いてその身  
を固くさせた。しかし、銀時は違った。針の飛んできた方向を見据  
えると口を開いてこう言った。

「出てこいよ。この能無し天人に指図したの、やっぱりテメーだっ  
たんだな。」

「えっ!?!」

銀時の声と共に現れた姿に、新八と神楽は息を飲んだ。

「貴女は 紅華さん…!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0038t/>

---

銀の魂輝く時

2011年10月4日23時16分発行